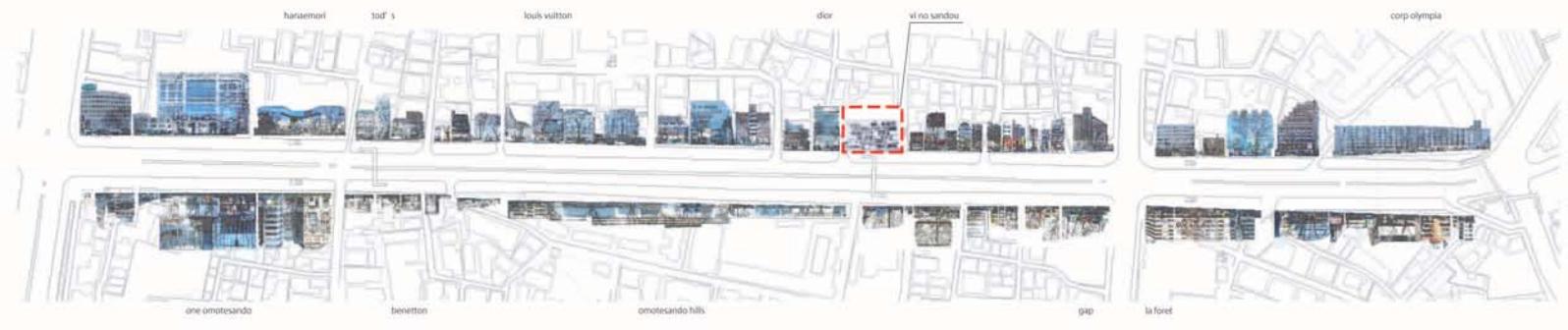




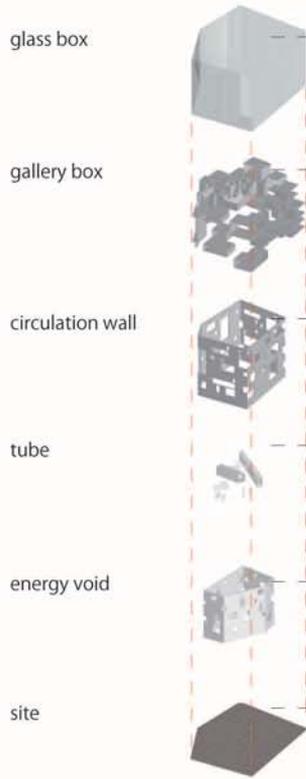
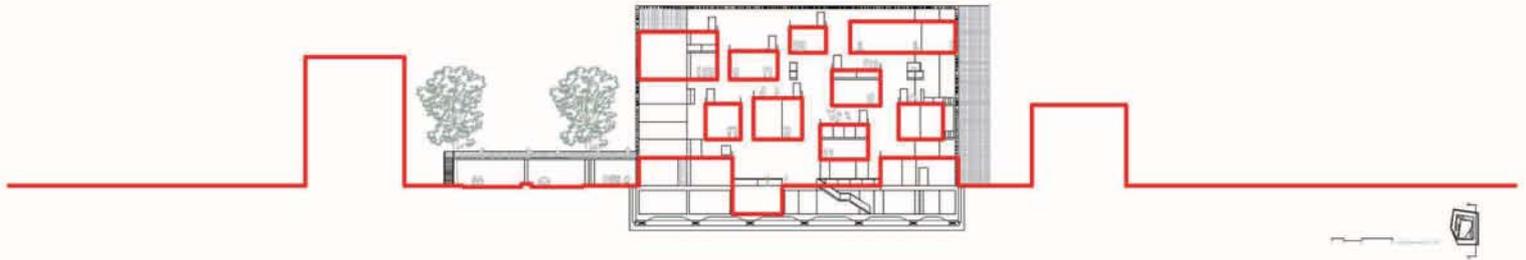
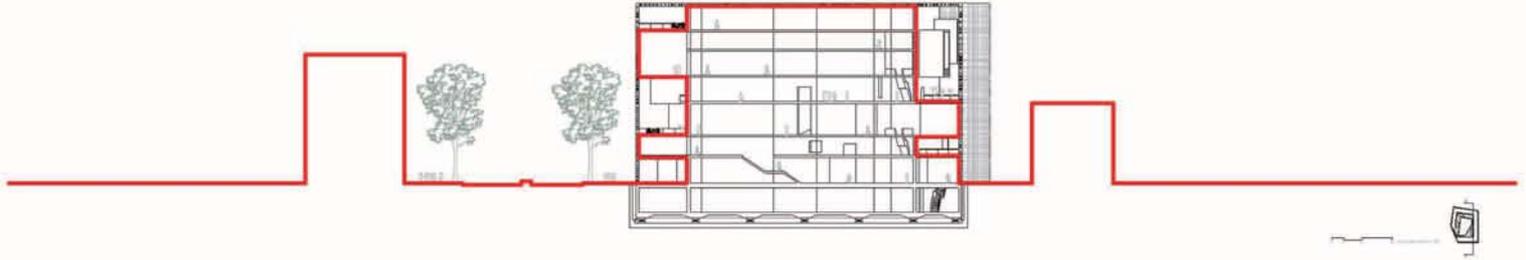
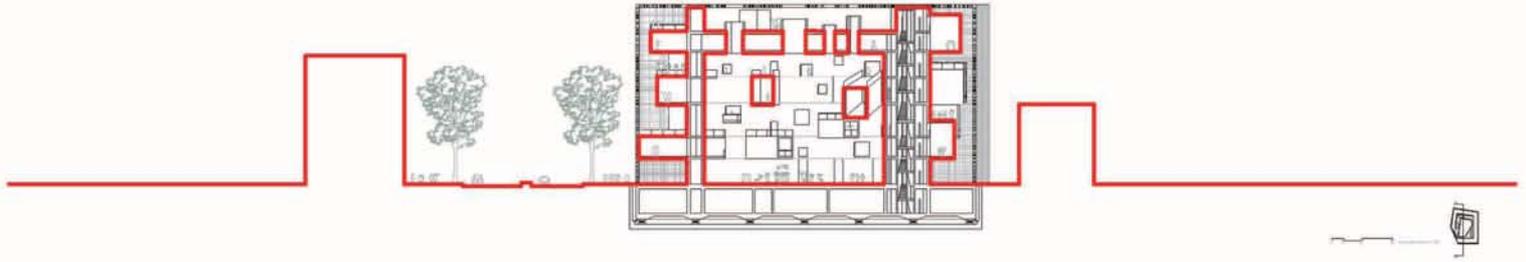
facade



表参道に出現した『美の参道』では断面的に異なるプログラムを円状につくり出すことで秘密結社のような、はたまた集落のような様相を見せる。それが、煩雑とした内部空間をつくり、整然としたファサードで覆われることにより表参道に現れる建築として機能する。それぞれ空間的に遮られる構成ではなく、緩やかにつながれた構成を取ることで『美の参道』全体が表参道界隈の広場・ギャラリーとして機能し、街全体と一体的な建築空間がつけられる。



permanent gallery and the exhibition on city



縦横ルーバーをアトランダムに格子状に配置し密、疎の表層を意図的につくりだし内外の光の演出を狙う。外部空間に対しては行灯のような、内部空間に対しては木漏れ日であったり陽だまりをつくりだし表参道の新たな顔として機能する。

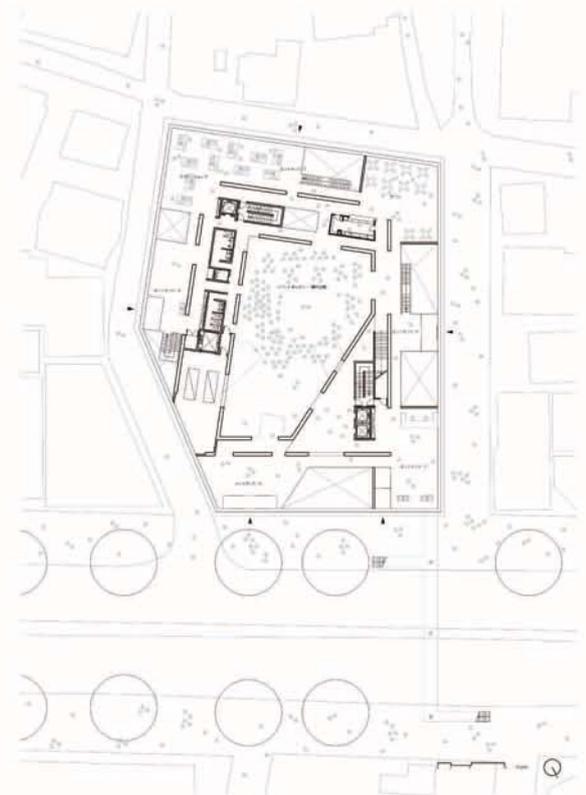
ボックスの配置はネガスペースであるボックスの外の空間における天井の高さひろがり等から規定される。ここでは都市の祭りのような、同時多発のイベントが行われ様々な創造性を誘発する。また、5方向に開かれた33個のギャラリーボックスは光の大砲となる。

サーキュレーションウォールでは『美の参道』内の動線や境界面の操作を担う。すべてを開放することで、無料スペースとなるし、閉じれば状況に応じたギャラリースペースをつくりだすことができる。

チューブはショートカットを単につくり出すだけでなく、エナジーヴォイド内の視界を多様にする働きを持つ。見る見られるという関係性が人間の本能を活性化させファッションストリートとしての本来の姿をつくりだす。

エナジーヴォイドは誰でも立ち寄ることのできる都市の屋内広場としての顔を持つ。サーキュレーションウォールに写る人影が時にはフレームに入った一枚の絵のようになり、二度と同じ様相を映さない。

敷地は表参道とキャットストリートが交差する位置にある。成り立ちが異なるストリートの接点はまさに様々なものの出会い発見の場所ではないだろうか。都市のたまり空間をつくり出すには最も適した場であるといえる。



B1F



2F



3F



4F



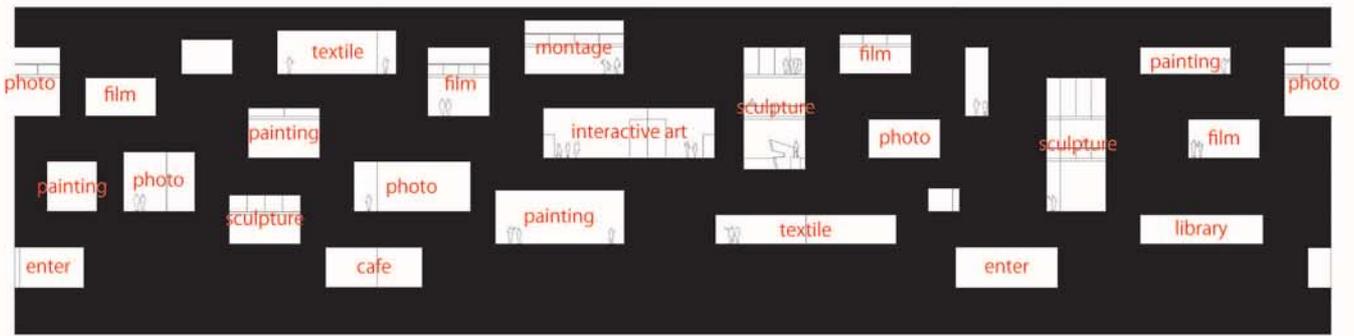
5F



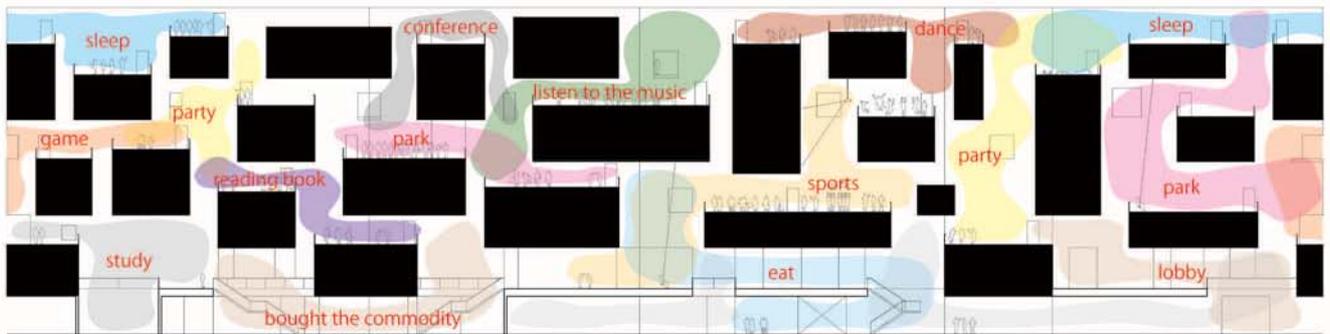
6F



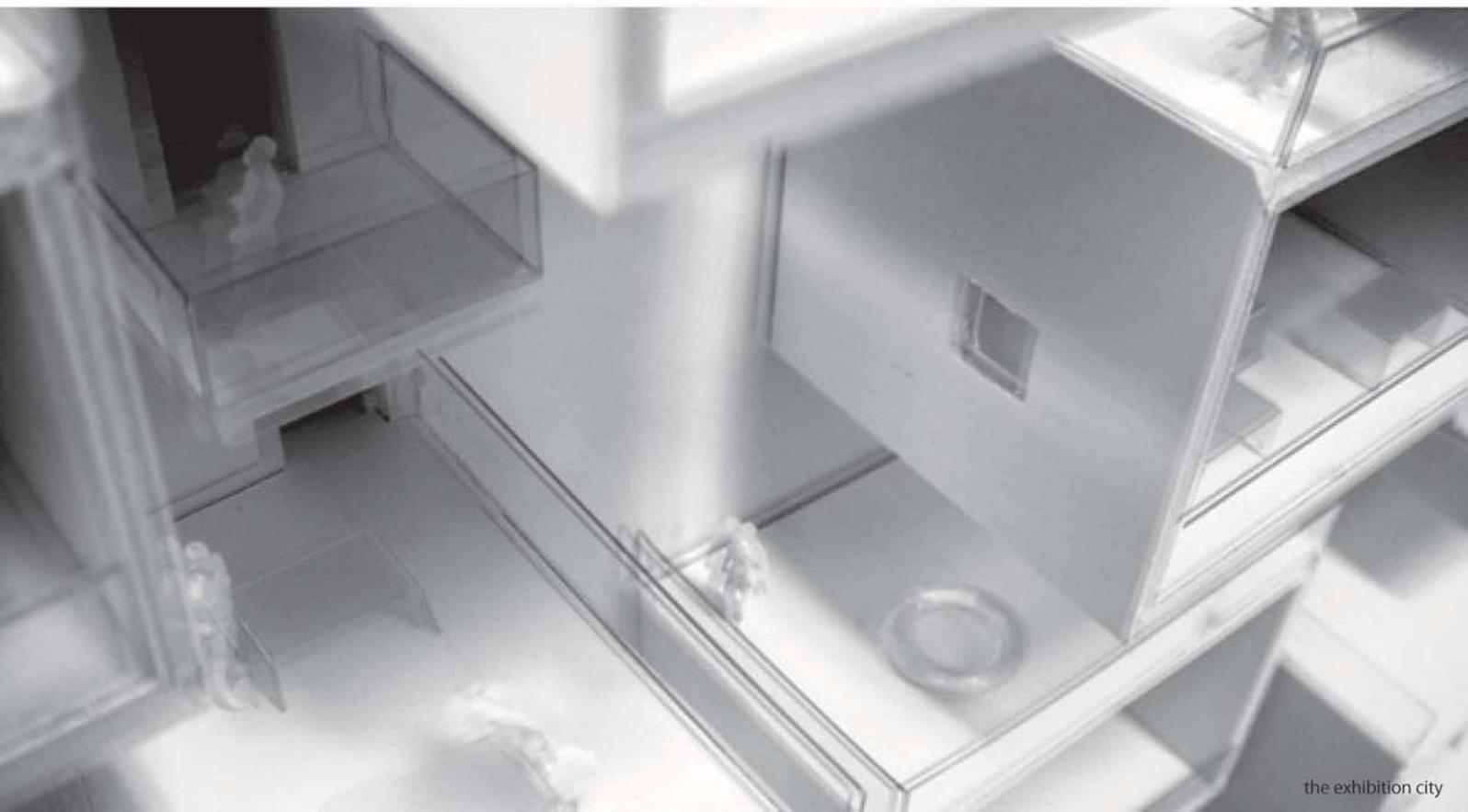
7F



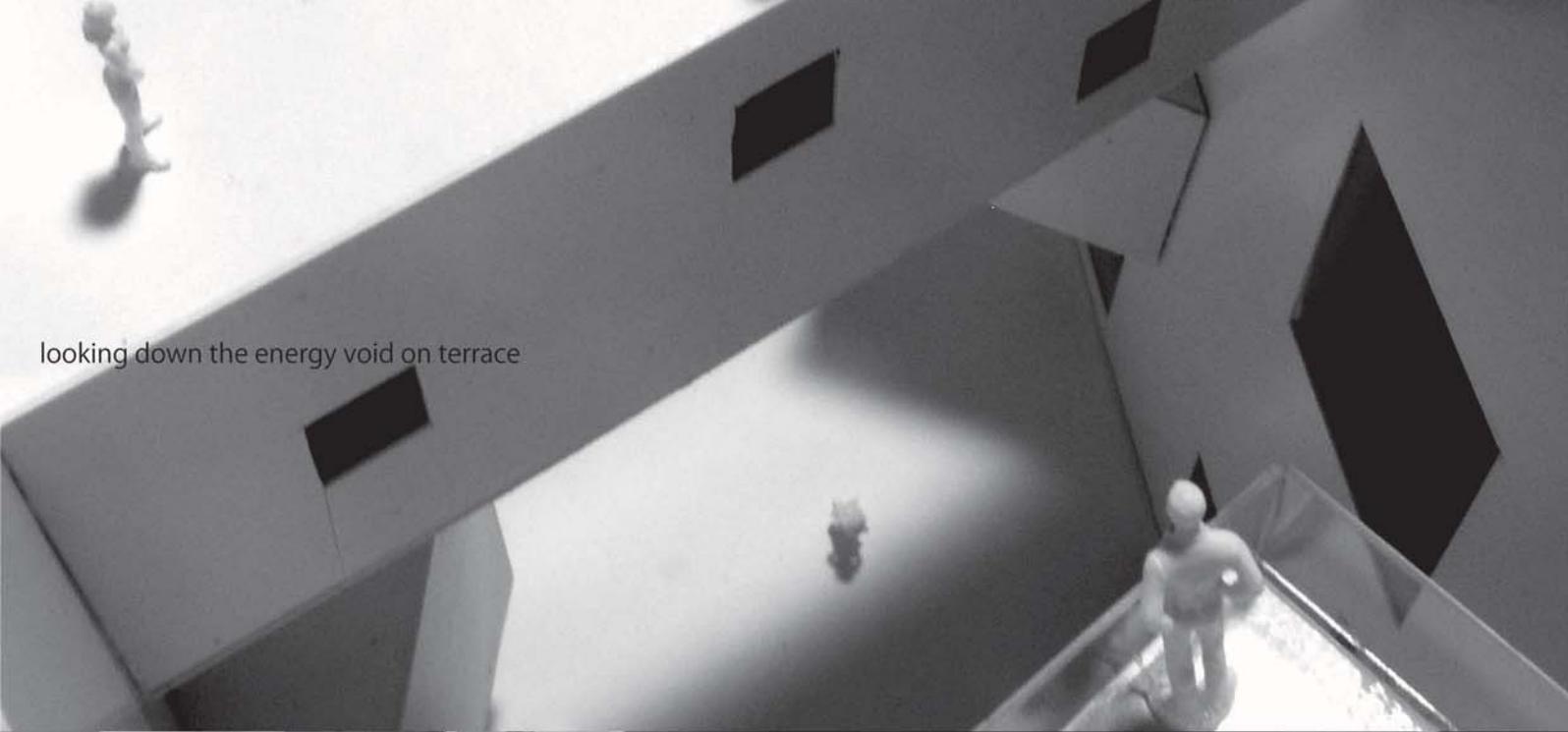
gallery box では、ボックスごとの立米比を変えることで展示に変化を与える。また特定の展示を行うことにより目的を持った人間を集める要素を持つ。小窓から、the exhibition city を垣間見えることもでき、ボックス内にいながらも、都市空間と接し、来館者に新たな創造を喚起させる。



the exhibition city では、都市における様々な人と人の関係を構築するプログラムが緩やかに展開される。買い物をする。ものを食べる。ダンスをする。音楽を聴く。読書をする。会議をする。安らぐ。通過する。・・・というような多様で煩雑なものらが一挙に展開され、流動する空間となる。さらに、相互にそれらが可視されることで、この場で新たなかたちの都市の広場が現れる。



looking down the energy void on terrace



various festive occasions are done on the gallery box



feel other activities

